

オリエントとヨーロッパ・アイデンティティ

18世紀フランス知識人たちのエジプト

杉本 淑彦

1. モンテスキューとピュフォン

アイデンティティは「他者」との対置関係を通じて形成されるものだと考えた場合、18世紀末から今日にいたるまで、フランス人のヨーロッパ・アイデンティティにとって、もっとも重みのある「他者」は、地中海の対岸に広がるイスラーム世界に他ならないだろう。18世紀末のエジプト遠征、1830年のアルジェ占領、その後のアルジェリア、チュニジア、モロッコの各植民地化、そして20世紀後半のアルジェリア戦争等々。近現代のフランス史は植民地問題を抜きに語れないし、フランスの植民地問題はイスラーム世界を抜きに語れない。近現代のフランス人にとって「他者」とは、まず第一にイスラーム世界であったし、今もそうでありつづけているのだ。本報告では、エジプト遠征に先立つ時代のフランスを取りあげ、その「他者」意識がどのようにエジプト遠征を準備するものだったか、を検討する。

エジプト遠征が断行されるちょうど半世紀前の1748年のことだ。18世紀フランスの知の世界を代表する、そんな政治思想書のひとつが出版された。モンテスキューの『法の精神』である。そこには、ヨーロッパ内はいうにおよばず、ヨーロッパ外世界についても膨大な情報がつづられている。ヨーロッパ外に足を踏み入れたことのないモンテスキューは、大量の文献を渉猟したうえで、この大部な書物を著した。そういう意味で『法の精神』は、18世紀中葉のフランスが有していたヨーロッパ外情報を集大成したものだった、といえるだろう。

『法の精神』は、6世紀イスラーム化以降のエジプトそのものについては寡黙だ。しかし、イスラームに関してはもちろんのこと、属国エジプトを含むオスマン帝国一般については多弁である。たとえば、イスラ

ーム国家とヨーロッパのキリスト教国とが対照的に論じられたりする。そしてモンテスキューは、キリスト教会制度に無批判な人物ではけっしてなかったが、この対照論法のなかでは、両者の優劣をこんなふうには鮮明に意識するのだった。

キリスト教は純粹の専制政体とは縁がない。それは福音書で柔和がひんぱんに説かれているので、君主が臣下を罰したり、残虐を行う時の専制的憤怒には、この宗教は反対する。この宗教は多妻制を禁ずるので、キリスト教国の君主はあまり閉じこもっていないし、それほど臣民と離れていない。したがって、より人間的である。かれらは法にしたがう心がまえをより多く持ち、好き勝手なまねをやることはできぬことをより理解できる。イスラーム君主がたえず死をあたえたり受けとったりしている間に、キリスト教徒の間では、宗教が君主をより怯懦でなく、したがってより残酷でなくしている。君主は臣民に期待し、臣民は君主をあてにする。なんと立派なことだ。キリスト教は、あの世の幸福だけを目的にしているように見えながら、この世でもわれわれを幸福にする。(24 篇 3 章)(訳は根岸国孝による。以下同じ)

『法の精神』のなかで描かれるイスラーム国家は、ようするに、「人間的」キリスト教国の対極にある。そこではおぞましい恐怖政治が常態化している、とモンテスキューは考える。専制国家では、「宗教が他のどの国におけるよりも勢力を持っている。それは恐怖につけ加えられた一種の恐怖だ。マホメット教諸国では、宗教から人民はその君主に対して持つ驚くべき畏敬心を一部分は引き出している」(5 篇 14 章)というのだ。

さらにイスラームは、「征服者によって与えられた宗教」であり、「剣のこししか語らず」「破壊的」であるとか、「あらゆることに関心を失わせる厳格な宿命主義」からのがれられないでいる、とも痛罵される(24 篇 4、11 章)。

正妻を 4 人まで娶ることが許容されるイスラームの多妻制も、正妻なら一夫一婦制を建前とする社会に生きるモンテスキューには、当然、性的放縦さの顕れだと思われた。しかも、「自然が否認するあの愛」、つまり男性同性愛がこの多妻制から生じるのだ、とモンテスキューは考えもした。「なぜなら、一つの放埒はかならず他の放埒を導くからである」

（16 篇 6 章）

それでは、非人間的なものとされるこのような事柄でイスラームが特徴づけられるのはなぜか。モンテスキューは、その答えを風土のなかに見いだしたようだ。

暑い国の民族は老人のように憶病である。寒い国の民族は青年のごとくに勇敢である。（……）寒い国々では、人々は快樂にたいしてあまり感受性を持たぬであろう。温暖な地方では、それは、より大きく、暑い地方では極端になる。（……）北方の国々には、悪徳の少ない、かなり有徳な、多くの誠実と率直とを持った民族がいる。南方の国々に近づいて見よ。諸君は道徳そのものから遠ざかる心持がするだろう。（……）ある地方の暑さがそこでは肉体がまったく無力になるほど烈しいことがありうる。そうなると衰弱は精神自体にもおよんでくるであろう。なんらの好奇心、なんらの高尚な企図、なんらのあっばれぬ感情も起こらないであろう。その人々の愛好するところはいずれも消極的となり、そこでは懶惰が幸福となろう。（14 篇 2 章）

こんな文章が、『法の精神』のなかに数多く見られる。暑い国 たとえばエジプトなどはフランス人にとって「暑い国」の代表なのだろうが、そこでは住民の心性や習俗が、気候風土ゆえに好ましくないものになる、というわけだ。もちろん、モンテスキューは単純な風土決定論者ではない。心性や習俗は、風土によって変化するものである一方で、「法」によっても変化すると、つぎのように考えているのだから「よい教育が精神の成熟している人々よりも子供たちにいっそう必要であるように、こうした（南方の）風土の人民はわれわれの風土の人民よりもいっそう賢明な立法者を必要とする。容易にまた強烈に印象を受ける人であればあるほど、適当な方法で印象をあたえられ、偏見を受けず、理性によって導かれることがいっそう大切である」（14 篇 3 章）

ここでいわれている「賢明な立法」とは、もちろん、現状ではヨーロッパを、なかんずくイギリスを手本にして、その「法」を「暑い国」にもたらすことである。イギリスの憲政をみならい、まずフランスの政治を改革し、そのうえで、あるいはそれと並行して、フランスが賢明な憲政を「暑い国」にもたらすべきこと。モンテスキューは、フランス人、ないしヨーロッパ人の人類史的使命をこんなふうに考えていたのであ

る。

『法の精神』が出版された翌 1749 年、それに優るともおとらず大部な著作の刊行が開始された。著者が死ぬ 1788 年まで断続的に発巻された、ビュフォンの『博物誌 *Histoire naturelle générale et particulière*』(全 36 巻)である。1739 年に 32 歳の若さでパリの王立植物園園長となった博物学者ビュフォンは、その後もずっとヨーロッパ自然科学世界の大立者でありつづける。この浩瀚な『博物誌』には、大は地球から小は昆虫まで、じつに多様な「物」が取りあげられている。その量からして『博物誌』は、現物調査をも 1 人の人間がすべておこなった、という代物ではありえない。おおかたが文献渉獵による知見であり、そういう意味で『博物誌』は、『法の精神』とおなじく、18 世紀のヨーロッパが有していた「物」情報を集大成したものだ。

『博物誌』中の第 3 巻として、『ヒトという種における変種 *Variétés dans l'Espèce Humaine*』(1749 年)という論考がある。そのなかでビュフォンは、まず、ヒトのなかに「変種」という差異が生じる要因として、気候風土と食糧、風俗の三つを措定し、なかでも気候風土が最大要因だと主張した。そのうえで、「もっとも温暖な気候である緯度 40 度から 50 度にいたる地帯」の住民のなかにこそ、「規範あるいは同一性のようなものを定め、皮膚の色や美しさに関する他のさまざまなニュアンスを、これと関連づけることが必要である」と結論づける。そして「この地帯に位置する文明国」として、「グルジア、チェルケス、ウクライナ、ヨーロッパ部トルコ、ハンガリア、ドイツ南部、イタリア、スイス、フランス、スペイン北部」を挙げ、「これらの民族こそが、地球上でもっとも美しく、もっとも姿が整っている」と断じた。

このように考えるビュフォンにとって、北緯 32 度以南に位置するエジプトの住民は、文明の階梯の、最底辺ではないにしても、下方に位置する「変種」以外のなにものでもなかったようだ。エジプトを住地とする「変種」のうち、ムスリムとしては「アラブ人」と「エジプト人」の二つを取りあげ、それぞれつぎのように説明するのである。(ただし、ここで説明されている「アラブ人」とは、アラブ人のなかでも都市民や定着農耕民ではなく砂漠に住む放牧の民、つまり、普通はベドウィン人と呼ばれる集団のことである。そしてビュフォンが言う「エジプト人」とは、ベドウィン人をのぞくアラブ人のことである。)

大部分のアラブ人は自由気ままな生活を送り、そこでは法さえ無視されてきた。規律も秩序もなく、人と人とのまともなつき合いさえほとんどない。タター人のような生き方である。首長の名でもって窃盗や拉致、掠奪が正当化される。悪徳が名誉とされ、美德は恥とされる。彼らの慣習といえば、狂信と迷信から生まれたものばかりだ。（……）

エジプト人のもって生まれた最大の欠陥は、怠惰と臆病さである。ひとつところから動かず、コーヒーを飲むか煙草を吸うか、あるいは惰眠をむさぼるか、それこそ何もしないか。はたまた、道ばたで無駄話をしているか。そんなことばかりで、日なが一日ほとんど何もしようとしな。そして彼らは、じつに無知なのだが、滑稽なほど虚栄心だけはやたらに強い。

2. サヴァリ『エジプトについての手紙』

『法の精神』と『博物誌』は、18世紀中葉にあいついで出版され、いずれも、膨大な文献を渉猟した所産であるという意味で、時代の精神を反映していると思われるテキストだ。著者も編者もエジプトに足を踏み入れないまま、エジプトの社会と住民について語った、という点でも共通している。一方で、エジプトを実際に訪れた人物の手になる書物が、1780年代後半、数種類出版された。『法の精神』などと比べると今日では著名さに欠けるが、当時は知識人層のあいだで少なからず注目された著作である。

そのひとつに、クロード・エチエンヌ・サヴァリの著した『エジプトについての手紙 *Lettres sur l’Egypte*』（1785年初版）がある。サヴァリは小ブルジョワ出身の青年で、ブルターニュ地方レンヌ市のコレージュ（学校）でオリエント諸語を学んだ後、彼自身の説明によれば、「人を創るのにもっともためになる学校こそ旅である」（序文）と考えオリエント旅行に身を投じ、エジプトに足を踏み入れる。1776年、26歳のことだった。人格陶冶の手段として旅行が貴族やブルジョワジーのあいだでもてはやされ、いわゆる「教養旅行」がブームになっていた18世紀、そのブームに背中を押されるようにしてサヴァリは、当時まだたいへん珍しかったオリエント旅行にいどんだのだ。3年間エジプトに滞在したのち、ギリシアを経て、1780年フランスに帰ってきた。そして、国王ルイ16世の侍医ル・モニエと懇意になり、彼の経済的援助を得て紀行

文の執筆に専念する。これが『エジプトについての手紙』であり、出版に際しては、王弟の1人から支援も受けている。

『エジプトについての手紙』は、ル・モニエ宛に書かれた総計72通の手紙からなっている。もちろん形式上だけのことで、実際には紀行文である。書き手の日常茶飯事ではなく、歴史と風俗の叙述に紙幅がおおきく割かれており、そのことも、不特定多数の読み手を最初から想定していたことをうかがわせる。

サヴァリは、フランスによるエジプト植民地化を唱道した。彼の論理はこうだ。まず、サヴァリの心に映ったエジプト、それは、農業の衰退にあえぎ昔日の繁栄を失った地だった。衰退の直接因についてサヴァリは、アラブ人の進入以降、つまりイスラーム勢力による征服以降、灌漑水路の保守がなおざりにされたことを挙げる。「大地は、もはや潤されることなく、灼熱の日射しを浴び続け不毛の砂土に化し」、「かつては豊かな農地と、富み栄える都市のあった場所に、今では、砂漠とナツメヤシの樹で囲われたみすばらしい小集落が散在するのみ」(第1書簡)、というのだ。

文化育成という点でも、アラブ人はこき下ろされた。アレクサンドリアに滞在していたとき、青年知識人としてのサヴァリの脳裏に浮かんだもっとも厭わしい記憶、それは、アレクサンドリア図書館蔵書の焼却事件だった。ヘレニズム時代のプトレマイオス朝期に起源を持ち、ローマ帝国時代にも蒐集がすすめられた世界最古の図書館の蔵書が、642年のこと、アレクサンドリアを占領したアラブ人將軍アムルの命によって、浴場の燃料として燃やし尽くされた、とされる事件である。その事件の影響を、サヴァリはつぎのように描いた。

この悲劇的な放火によって、いったいどれほどの知識と技術が、どれほどの人類の精華が、この世から失われてしまったことか。科学発祥の地であったこの国が無知のヴェールで覆われるようになった端緒は、おそらく、この不幸な時代にある。うるわしきヨーロッパといえども、その有する書物の4分の3が突如灰燼に帰し、印刷技術も文字も持たない民族によって支配される事態になれば、何世紀も前の野蛮状態に逆戻りしてしまうだろう。オリントを襲った運命は、まさしくそういうものだった。アラブ人の支配下に屈したアレクサンドリアは、こうして、その輝きをじょじょに失っていった。(第2書簡)

農業の衰退のみならず文化の後退。こうしてアラブ化以降のエジプトは退廃過程に入った、とサヴァリは考えたのである。アラブ人に対する厳しい眼差しだ。しかし、ファーティマ朝からアイユーブ朝、さらにマムルーク朝へとつづく時代において、実際のエジプトは経済的にも文化的にも繁栄を享受していた。この程度の知識はサヴァリ自身も身につけており、したがって彼は、エジプト退廃の主犯をアラブ人だとは考えない。アラブ人は従犯なのだ。主犯と目されたのは、15世紀にマムルーク朝を滅ぼしエジプトを属国化した、トルコ人のオスマン帝国だった。プトレマイオス朝からオスマン帝国下の現在にいたるアレクサンドリア史を略述した第2書簡のなかで、アラブ人とトルコ人のそれぞれの責任の軽重が、こんなふう描かれる。「(アラブ人支配下時代には、)衰退しつつあるアレクサンドリアも、その外観には華やかさと壮麗さをまだとどめていたので、見る者を感嘆させたものだった。15世紀、トルコ人がエジプトを支配するようになり、(……)水路は砂に埋もれ、商業活動も沈滞するようになった。アラブ人が住まっていたアレクサンドリアは人口減少の一途をたどり、ついには、その広大な市域から人の影さえなくなってしまった。」

なぜオスマン帝国支配下でエジプトの農業・商業の衰退が加速したのか。サヴァリはこれを、まず、トルコ人の無為・怠惰でもって説明する。トルコ人支配層の無為が灌漑水路を荒廃させ可耕地を失わせた、という説明である。それだけではない。無為は商業の衰退ともつながっているとされる。たとえば、ナイル河口に位置するダミアット港が問題にされる。強風時には地形のせいで自然河口から入港することが危険なのだが、運河を建設すればこの危険から免れる。しかし、こんな簡単な工事がおこなわれてこなかったために交易が阻害されている、というのだ(第23書簡)。

無為・怠惰は古代建造物にも深刻な影響をおよぼしている、とされた。トルコ人は古代建造物の保守にまったく意を払ってこなかった、というのだ。それと同時に、この文化遺産問題については、無為・怠惰の反対の極である「破壊行為」もやり玉に挙げられた。たとえば、デルタ地帯に位置するザマヌの町でのことだ。「うっとりするほど美しく、見事な」ヒエログリフが刻印されている石片が無惨に散乱するさまを見て、サヴァリは嘆息する。「トルコ人は、その野蛮さゆえに、これらの美しい廃墟を棄ておいている。それどころか、毎日のようにここに来ては、大理

石の塊を持ち去ったり、粉挽き場の石臼にするために柱を切りきざんでいる」(第22書簡)。

経済と文化の両面においてエジプトの退廃化に拍車をかけることになったトルコ人支配層の怠惰心と破壊心。この両極端の心性が混ざりあった支配のありようを、サヴァリは専制政治という言葉で要約した。たとえば、ダミアット港の改良工事がなされてこなかった理由を説明するとき、サヴァリはこんなふうに語るのである。「専制政治は民衆の幸福や利益など意にかけない。破壊と同義語でなかったためしはなく、その一方で、何かを創り出そうとする意欲も能力も持ちあわせてはいない」(第23書簡)。そして、カイロ市内の高台、モカタムの丘に登り、とうとうと流れるナイル河の流域を見渡したおりの印象を、サヴァリはつぎのように吐露するのだった。「かつて芸術と科学が豊に咲き誇っていたこの地は、芸術や科学を軽侮する無知で野蛮な民族に今は占領されている。専制政治の鉄の支配によって、世界でもっとも美しいこの国が押し潰されている」(第8書簡)。

古代エジプトの繁栄と、6世紀アラブ化後の衰退、そして15世紀以降、オスマン帝国支配下のいっそうの凋落。サヴァリのこのエジプト史理解は、もちろん、3年間の現地滞在から得たものではない。エジプト史を学びに現地へ出かけたわけではさらさらないのだ。サヴァリにかぎらず、当時のフランスで高等教育を受けた彼のような知識人なら、おそらく誰も頭に思い浮かべる既習のエジプト史なのだろう。

一方で、フランスは専制支配にあえぐエジプトとどのような関係を持つてばよいのか、という問題になると、サヴァリは3年間の現地体験から論を組み立てていく。つまり、オリエントとオクシデントとの結節点に立地するという交易上の好位置にくわえて、エジプトは一次産品の高い供給力を今日でも保持している、という実見から出発するのである。トルコ人による征服以降、「繁栄の輝きの大部分が失われたとはいえ」、そして「オクシデントとオリエントの富が往き来していた運河の多くが砂に埋もれたとはいえ」、「その素晴らしい位置と豊かな大地ゆえに、エジプトはあまりある利点に恵まれている」(第6書簡)というのだ。

したがってエジプトの将来はけっして暗澹なものではないはずだ、とサヴァリは論をすずめる。サヴァリによれば、諸悪の根源であるオスマン支配体制をくつがえしさえすれば、エジプトは繁栄し、住民もそれを

十二分に謳歌できるのだ。「開明的な民族」による「賢明な統治」を導入すればよいのである。「この美しい国は、芸術を愛する国民の手に委ねられさえすれば、ふたたび世界の商業の中心になるだろう」(第 33 書簡)し、「何世紀ものあいだ専制政治の軛の下にあって腰を曲げ頭を垂れたまま、ありとあらゆる不幸に呻吟させられてきた原住民も、節度を知る政府に支配されるようになれば、地上で最も仕合せな民族となりうるだろう」(第 42 書簡)というわけだ。そして、……

エジプトには海運業も工場制手工業もない。唯一有利な点といえば土地だけである。しかしそれが実に豊かな土地なのだ。開明的な民族の手に委ねられるエジプトの未来がどのようなものになるか、それをぜひ想像してもらいたい。その美しい羊毛から、どれほど素晴らしいラシャが製造しうるかを。その上質な亜麻から、どれほど素晴らしいリンネルが、そして一年性と多年性の 2 種類の綿花から、その異なる横系縦糸で織り上げられる、これまたどれほど素晴らしい綿モスリンが製造しうるかを。雨の降らない、嵐の吹かない気候の下で蚕が良く育つことを考えれば、絹の導入は容易く、その絹糸からどれほど素晴らしい布地を製造しうるかも想像してもらいたい。それだけでない。運河を開削し、堤防を建設すれば、どれほどの富が生まれることが。(……) 山には花崗岩と斑岩、雪花石膏(アラバスター)があり、これも、貴重な交易部門となるだろう。インディゴや、砂漠で見いだせるその他の染料も、染色業にとって言い尽くせないほど価値あるものだ。これらの富は、けっして絵空事ではない。何世紀、何十世紀にわたって、たしかにエジプトはそれらを所有していたのだ。賢明な統治さえおこなわれれば、自然が惜しみなく恵むこれら宝の山は、すべてふたたびエジプトの手に戻るのだ。(第 47 書簡)

それでは、エジプトにおける現在のオスマン帝国支配をくつがえせる力がフランスにあるのだろうか。サヴァリはこのことに楽観的な見通しを持っていたようだ。エジプトの実質的支配層がマムルーク勢力であること、そのマムルークたちは総計 24 名のベイによって束ねられていること、そしてベイのトップにイブラヒムとムラドの 2 人がいることに言及したうえで、マムルークの弱点を、ヨーロッパと対比させてこんなふうに説くのである。

マムルークたちには絶えず武芸の訓練が施される。暑さや、身をさいなむような砂漠の渇きにも毅然として耐えうる、そんな能力も、訓練を通じて彼らは身につける。その逞しい体も、不屈の勇気も、同じく訓練の賜物である。ただ一つ、優秀な兵士となるうえで欠けているものがある。ヨーロッパ式戦術を学んだ教師が欠けているのだ。マムルークたちの軍団は、われわれの将校たちによって統率されれば、地球上のどの国民にも、その勇猛果敢さで譲ることはないだろう。しかし彼らは、隊形を保って戦おうとはせず、完成の極みに達している今日最先端の砲術にもまったく無知である。(第40書簡)

たしかに、「賢明な統治」をおこないうる「開明的な民族」がフランスだとは、サヴァリは明言しなかった。植民という言葉もまったく使わなかった。ましてや、フランス軍によるエジプト侵攻を唱えることもなかった。しかし、ヨーロッパ勢力が、なかでもフランス民族がエジプトを植民地として統治する任にあずかれれば、オスマン帝国の支配下に入ることによって退廃の極みにいたってしまったエジプトに昔日の繁栄を回復させ、住民の生活を安んじることができる。ヨーロッパの優れた軍事力でもって、エジプトの現在の支配層マムルークを一掃することもできる。こんなふうな自負を、『エジプトについての手紙』の行間から読み取することは容易だろう。

サヴァリがフランスによるエジプト侵攻とその植民地化をあえて公言しなかったのは、エジプトの宗主国であるオスマン帝国に対する現実政治上と経済上の配慮からだろう。16世紀のフランソワ1世以来、フランス王国はオーストリア・ハプスブルク家を牽制するために、そして東方貿易の利益を確保するために、オスマン帝国と一貫して友好関係を保っていた。ルイ16世の王弟から経済的支援を受けて出版される運びとなった『エジプトについての手紙』が、トルコ人批判を一般論として展開する一方で、フランスによるエジプトへの介入を具体的には提言しなかったのは、本書出版の経緯からして当然のなりゆきだった。

半世紀前にモンテスキューの『法の精神』が世に出た頃の若者たちは、エジプト遠征時にはまだ70歳代で、存命中の者もあっただろう。書物というものは出版されたそれぞれの時代の精神を多かれ少なかれ反映しているものだとすれば、1789年エジプト遠征の頃、成年フランス人全体のエジプト観は、『法の精神』や『博物誌』、『エジプトについての手

紙』などの著作のなかに表されているエジプト観総体なのだ、といえるだろう。フランス人の心のなかの最大公約数的エジプトとは、ようするにこんな世界だった 豊饒な大地と、交易上たぐいまれな位置に恵まれた国。専制政治がはびこり、それゆえに経済的にも文化的にも自力では進歩の望めない国。イスラームが人びとを無知と宿命主義に落としこめ、その結果として専制政治が余命を保っている国。そんな国だからこそ、進歩の最先端を走るようになったヨーロッパが、とりわけフランスが乗りこみ植民地化すれば、文明国の仲間入りは容易だ。 19世紀から、脱植民地化が大勢となる 1960年代まで、いやひょっとして今日まで基本的にはつづく、イスラームに対するヨーロッパの優越意識である。

1798年5月。約3万人からなるフランス軍が、エジプトを目指し地中海の波間にあった。遠征の帰趨をフランス本土で見守ることになる人びとも、船べりから大海の彼方のエジプトを見やっている遠征軍将兵・科学者たちも、こんなヨーロッパ優越意識を懐いていたのである。

引用資料

- ・モンテスキュー (根岸国孝訳) 『法の精神』(『世界の大思想 16』河出書房、1966年)
- ・ *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, (New York: Pergamon Press, 1986, vol.5. Microprint ed. Originally published in Paris: Briasson, 1751-1772)
- ・ Claude Étienne SAVARY, *Lettres sur l’Égypte*, (Paris: Onfroi, 1786 seconde éd.)

(京都大学大学院文学研究科教授)